

「日本免震構造協会会長」が 改革を宣言 構造家・中澤昭伸

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■写真館の息子

1949年岩手県宮古市に生を受けた中澤昭伸さん。幼少期、地元の有名設計事務所が設計して実家の写真館を設計した。これが建築への入口になったかもしれないと語る。武蔵工業大学（現 東京都市大学）では望月重研究室で構造に進む。実は意匠設計を望んでいたが、アクシデントで課題の模型の提出が遅れたために鈴木一教授から「優」を貰えず諦めたとか。織本構造設計を選んだのは、研究室の先輩に大建築家・丹下健三の仕事をしていると聞いたからだ。教授の推薦で山本社長の面接に行ったが、ここでも事務所の鍵が閉まっていたとか云々、面白いエピソードには事欠かない。一緒に独立しようといっていた先輩がいたが、転職で会社に残るとい出し、そのお陰でサウジアラビアの仕事で丹下先生とできたのが32歳の頃。

その後、丹下先生とは横浜美術館の実設計を、黒川紀章さんとはオランダのゴッホ美術館の基本設計に携われたというから幸運な構造家として歩む。12人が同時に入社して定年まで続いたのは中澤さんだけで、社長にまで上り詰めた。技術力に加え、人を惹きつける会話能力に長けているし、面接時にいわれた「賞はこちらから下さい」というものではない」の言葉を胸に留めていて、純粋に建築が大好きな人でもある。建築家・芦原義信のパートナーとして創業した創業者の織本匠から続く「提案力のある織本構造設計」を牽引し続けたのだった。2020年に10年間務めた社長は勇退したが、最高顧問として実業に勤しむ日々なのです。



■日本免震構造協会会長になって

2022年6月に和田章会長の退任を受けて、日本免震構造協会会長となる。「地震国の日本において建築基準法第1条の目的を果たすのは、免震構造または制振構造しかないと言っても過言ではない」と、会長就任の挨拶で熱く万感を込めてのメッセージを送っている。来年30周年を迎える日本免震構造協会として、国への呼びかけの必要性も力説。次のステップとして、構造設計一級建築士ならだれでも免震の設計ができる「簡易免震設計法」の研究を行う時期に来ていると続ける。免震設計として1が「簡易免震設計法」、2が「告示免震設計法」、3が「時刻歴応答解析設計法」。ルート1～3は法適合確認対象とし、建物高さ60mを超えルート3で審査できない特殊な建物は、国土交通大臣認定を受けるといった免震設計体系ができればと考えているのだ。地震国日本に瓦礫の山を築くことなく人命を守り、自然環境にも大きく寄与する決意の中澤会長です。

■未来に向けて

中澤さんは、若い構造家にマニュアル本ではなく先人の書いた本を読むことを薦める。構造学者の秋山宏さんの『エネルギーの釣合に基づく建築物の耐震設計』（技報堂出版）を、構造に携わる人にはバイブル的な本と語る。免震構造の研究者の秦一平さん（日本大学理工学部建築学科教授）にも注目している。所属や立場を超えて地震に強い建物をつくるのが、日本における構造設計者の社会への貢献なのだ。社内にも目を向けて、新人とはDRを取り入れてディスカッションをして「ITをうまく使え！」と掛け声をかける。実際に準じたソフトをつくらなければならないと切実に思うのです。

浅黒く精悍な顔つきから「趣味はゴルフ」で正解だ。旅行も好きで、特に会社の勤続功労者に与えられ、妻と訪れたカナダとハワイが思い出に残る。息子さん、家族に会いに行つて来たシンガポールが楽しかったと、よき家庭人の顔も少し見せる会長なのでした。